



中島敦の虎



saolipooh

中学校の教科書で『山月記』を読んだ。読んだ当初は、その文体の難しさに四苦八苦しただけで、特に大きな感銘を受けなかった。けれど、どうも虎になってしまった詩人の悲しさが忘れられなく、時折私は、この小説を思い出しては、遠くから虎のわななきを耳にするような思いにとられることがあった。だから、大人になって、スマートフォンのアプリで、著作権の切れた小説を無料で読めることを知ったとき、『山月記』を読むことになるのは、必然的な流れだった。

私は、小さいときから絵本が好きだった。いや、絵本というよりも、字を読むことが好きで、車に乗ると、流れる風景のなかの看板を眺めて、読めない字も、なんとなくこういうことだろうと想像するのが楽しかったので、窓の外ばかり見ていた。そして、寝る時間になっても、親の目を盗んで、廊下から漏れる光を頼りに図書館から借りてきた児童書を読む私に、母はなにげなく「小説家になったら」と言った。「しょうせつか?」「絵本とか、書くひとだよ。」そんな職業があるとは知らなかった私は、それから、「小説家になる」ということを自分の夢とした。学校ではしょっちゅう「あなたの夢は?」と聞かれるし、親戚や近所の大人たちも、子供とみれば「将来、なんになりたいの?」「夢はなに?」と聞いてくる。それまで、私は「将来の夢」といえば、お花屋さんとか、宇宙飛行士とか、警察官とかお姫様だとか、そういうことだと思っていたので、自分に特有の夢ができて、私は嬉しかった。だから、私は、ほとんど呪いのようにずっと「小説家になる」と思っていたし、それは夢というよりも、だんだん、確信というか、近い将来の事実であると思った。私は、努力などしなかった。自分は小説家になる定めにあるのだから、あくせくして「小説を書く練習」をするのは、恥ずかしいと思っていた。もちろん、本を読んだり、詩のようなものを書くのは好きだったから、そういうことはしていたが、あまり人にも見せなくなった。思春期になるにつれ、小説家になる、という確信は、才能のない平凡な人たちが、将来の夢を公務員や大学教授に切り替えた人たちには相いれない価値観だということに気づいたからである。「小説を書いている」ということは、多くの高校生にとっては、ほとんど嘲笑すべき恥ずべきことであった。けれど、私は確信をしつづけていた。私の確信は、もう一つ余計な文言がつけくわえられるようになった。「私は、小説家になり、20歳で芥川賞をとる」高校生卒業間近のその頃、私は、もう小説など書いていなかった。詩のようなものは書いていたが、本当にきちんとした物語を書くのは、やめてしまっていた。それは、高校生のはじめに初めて出した文学賞に落選してからのことだった。私の才能は溢れるけれども、まだきちんと形になっていないのだ、と思った。形になるまで、時間をかけて温めればいいことだ、と思っていた。小説を書かない間に、私の自分の才能への信頼は、高まるばかりだった。いつか、小説がきちんと書ける日が来る。そして、それは20歳になったときのことだ。20歳になって、私は華々しく文壇にあがる。美しい、若い前代未聞の小説家として。

そして、私の20歳になった年、二人の20歳の女の子が芥川賞を受賞した。私は、信じられなかった。自分の思い描いていた自分は、自分ではなかった。美しく才能あふれ、しかもその才能を開花させた女性は、私ではなかった。自分は、ただの本が好きな大学生でしかなかった。特

別に訓練をしたわけでもなければ、文学賞を受賞したわけでも、いや、それどころか応募さえしていなかった。私の思っていた私が、私でないとしたら、いったい、私はなんなのだろう？私のなかで、虎が鳴いた。

それからの私は、自分というものがわからず、モラトリアムのなかで、仕事も恋愛も上の空だった。自分というものが分からないまま、無理やり、やりたいことや好きな人を見つけ、なんとなく過ごしていた。もちろん、そのときそのときは一生懸命だし、苦しみも悲しみも喜びもする。けれど、本当に苦しくなったとき、ふと、これはいったい、なんなのだろう、とバカバカしく思う。自分の人生ではない、と思う。なぜなら、自分の人生は、20歳で芥川賞をとる小説家だったのだから。

そんなある日、『山月記』を読んだ。己の臆病な自尊心と尊大な羞恥心が己自身を虎の姿に変えてしまったと語る、愚かで哀れな虎の話を。それは、まさしく私の話だった。私は、自分のなかで勝手に、自分ではない自分の姿を作り上げてしまっていた。そして、その姿に酔っていたのだ。だから、本当の自分のことを本当だと思わずに、否定ばかりしていたのだ。本当のただ本が好きで、想像が好きで、自分のことも表現できたら、と考えていた純粋な私は、自分ではない自分を探し求め、飢えた獣の虎に食べられ、見えなくなっていたのだ。虎はまだ、ここにいる。そうして、本当の自分を求めて餓えている。けれど私は、もう自分の人生を自分のものじゃないと思ったりしないと思う。中島敦の虎が、鋭い目でこちらを見ている。